

## マラルメの想像的太陽

### — 金髪詩篇をめぐる —

加 覧 伸 彦

ミッシェル・フーコーはその著「言葉と物」の中で、19世紀以降、とりわけマラルメ以降、言葉が何かある対象を指示する機能体としてよりも、むしろ己れ自身を創造し、構成する力を持った一つの事物としての性格を強めていることを指摘している<sup>1)</sup>。フーコーの言を全面的に受け入れる必要はないであろうが、それにしてもマラルメにおいて言葉が事物的性格、あるいはさらに生物的性格を帯びていることは認めねばならないだろう。マラルメにとって詩を書く主体は詩人なのではなく、語そのものが自己を構成して詩篇となるのである。一見わかりにくく思われる主張であるが、マラルメは生涯にわたってこの主張をくりかえす。有名な“詩の危機”の一節で、彼は次のように書いている。

L'oeuvre pure implique la disparition élocutoire du poète, qui cède l'initiative aux mots, par le heurt de leur inégalité mobilisés;<sup>2)</sup>

(純粹な作品は詩人の語りながらの消滅ということを含んでいる。詩人は言葉に主導権を譲り渡すのであり、それらの語は不均衡にぶつかりあうことによって動員状態におかれているのである)

この一節でマラルメが言葉を自立的事物、己れを構成する力を持ったものとみなしているのは明らかである。“不均衡さ”“動員状態”といった語が用いられていることによって、言葉は事物の持つ厚みと不透明さを保証されていると言えよう。言葉の構造と世界像のズレがようやく明らかになりつつあった19世紀において、言葉の堅牢さ、永続性に対するマラルメの強い信頼は何に由来するのであろうか。一つには人間存在に対する彼の実存的認識の反映でもあろう。青年期のはじめに深刻な精神的動揺を経験した彼は<sup>3)</sup>、その経験のさなかで獲得した確信として、“人間は物質の空しい一形態にすぎない。”と断言するに到る。この言葉をよく吟味してみよう。物質とは、いつかは滅び去っていく存在である。人間が物質であるとすれば、人間とは虚無がとるつかのまの、かりそめの形態でしかない。従って人間が行う一切の営為は、最後は虚無へと還元される以上、結局は一つの“遊戯”でしかないであろう。詩作品もこの意味では遊戯にすぎない。確かに遊戯である。だがマ

ラルメにとっては詩こそ滅ぶべき人間が考えだした最高の遊戯であり、他の一切の営為に優越するのである。詩が存在するという事実によって、人間は物質のうちでもその卓抜した形態でありうると彼は主張する。その抽象性ゆえに言葉は現実の事物の持つ時間性を免れている。現実の事物はそれがいかに堅牢なものであってもいつかは時間とともに腐蝕せざるを得ない。物質の持つ宿命的な掟である。だが言葉はこういった掟とはいっさい無縁である。なぜなら言葉はイデーであり、滅びることのない本質そのものであるからである。詩人は彼自身がこの言葉そのものへ化身することによって、自己の、ひいては人間一般、滅ぶべき事物一般の永遠化を実現するといういさおしを果すのである。

ところで現実の事物とのつながりを断ち、自立的事物となった言葉で構成される詩篇はいかなる意味においても現実的なものではありえない。書物の紙片の中に現実の森や雷鳴を含ませることはできないのであって、詩作品は本来的に想像的なものである。時間性を持たない想像的なものは、その永遠性ゆえに滅ぶべき現実の事物に対して絶対的な優位性を誇るができるのである。この主張はマラルメの全作品を通じてあらわれており、筆者がこれから検討しようとしている金髪詩篇群もその例外ではない。これらの金髪詩篇群はマラルメの作品中でも特異なグループをなしているが、筆者の結論を先どりしてのべるならば、金髪とはマラルメにとって想像的太陽であり、現実の太陽（この太陽は日ごとに死に、また物質である以上究極的な死も予定されている）に代って詩人をまもる永遠の太陽、死を持たぬ太陽なのである。それでは具体的考察に入ることにしよう。

詩人の金髪に対する偏愛は既に若年の著作のうちにあらわれている。彼にとってはいさかか迷惑な友人であったエマニュエル・デ・ゼッサルの詩集についての彼の評論のなかに次のような文章がみられる。

Un dernier reproche, mais un grand: je n'ai jamais compris qu'un poète médit des blondes. Je sais que la Muse d'Em. des Essarts doit être brune: les brunes ont seules cette vivacité et seules peuvent inspirer ces vers frappés et nerveux. Mais l'idéal de la femme, — c'est-à-dire d'une des facettes de la beauté, ce diamant, — n'est pas la brune, Ève était blonde; Vénus blonde. La blondeur, c'est l'or, la lumière, la richesse, le rêve, le nimbe;<sup>4)</sup>

（ここで、最後の、だが重大な批判をしておこう。私は一人の詩人がブロンドの女性たちの悪口を言うのがどうしても理解できなかった。エマニュエル・デ・ゼッサルのミューズは褐色の髪に違いない。褐色の髪の女たちだけがこんな活力を持ち、このような力のこもった、たくましい詩句を着想させ得るのである。だが理想の女性像、すなわち美というこのダイヤモンドの切子面の一つという理想像、それは決して褐色の髪の女性ではない。イヴは金髪であった。ヴィーナスは金髪であった。金髪は黄金であり、光であり、豊かさであり、夢であり、後光である。）

いささかきざな文章であるとはいえ、それでもマラルメの美についての基本的な考えは、はっきりとのべられているように思う。美はダイヤモンドのように永遠不滅のものでなければならず、(これはマラルメの全作品および一生を貫いたテーマである)金髪はこの美の一つの側面をあらわしているのである。金の持つ永続性と貴重さ、光の持つ輝き、豊かさ、夢や後光の持つ魅惑と神秘性、これらの諸特性は金髪を想像的太陽とするに充分である。「エロディアッド舞台」冒頭にあらわれる金髪は氷のように冷たく、非人間的でありその冷厳さによって美を保っているが、しかしこの金髪もまた光と不滅性に彩られているのである。

Le blond torrent de mes cheveux immaculés  
 Quand il baigne mon corps solitaire le glace  
 D'horreur, et mes cheveux que la lumière enlace  
 Sont immortels,<sup>5)</sup>

(私の汚れなき髪の毛の黄金の流れは、私の孤独な身体を浸し、おそれによって凍てつかせる。光がまとわりつく私の髪は不滅なのです)

この「エロディアッド舞台」においては、早朝の金髪がうたわれているが、既にここにおいて“不滅の”という形容詞によって金髪の永遠性が明示されている。この非人間的で恐怖さえおこさせる金髪をエロディアッドが好むのは、それが持つ永遠性のためである。だがこの一節においてはまだ金髪自身が発光するには到っていない。“光がまとわりつく私の髪”という表現によってわかる通り、光はこの一節では髪にとって外在的なものである。金髪が真に想像的太陽であるためには発光源が外的なものであってはならないだろう。その意味では「エロディアッド舞台」における金髪はいまだ完全な想像的太陽とはいえないのであって、金髪自身が内部から光を放つ太陽となるためには次の詩“美しい自殺を誇らかに逃れて…”を待たねばならない。

Victorieusement fui le suicide beau  
 Tison de gloire, sang par écume, or, tempête!  
 O rire si lâ-bas une pourpre s'apprête  
 A ne tendre royal que mon absent tombeau.<sup>6)</sup>

(美しい自殺を誇らかに逃れて、栄光のもえさしよ、泡なす血よ、黄金よ、嵐よ、お笑いぐさではないか、もしかしここに、私の不在の墓を王者らしくひろげるために、緋色の世界が準備されているとしたら)

“美しき自殺”について諸研究家は一致した解釈を提供している<sup>7)</sup>。これは日没のことで

あり、太陽の日ごとの自殺であると。それにしても次のことをつけ加えておく必要があるだろう。日々に死を経験し、やがては決定的な死をも経験するであろう現実の太陽は決して詩人の理想の太陽ではあり得ないということである。マラルメにとって現実の太陽は詩の対象にはなり得ない。彼の作品「葬の乾盃」では現実の太陽は“pur soleil mortel”とよばれ、その致死性が明確に示されているほどである。また次のことも指摘しておこう。太陽の日々の死のあとには必然的に闇がくる。そしてこの闇こそは明らかに詩作の本質と通じるものである。詩篇をなしているインクの黒さは夜の闇に通じ、夜の闇の持つ奇怪さ、異常さは書くという行為の持つ不条理さ、狂気に通じる。この闇はまた意識の闇すなわち狂気や死とも類縁関係を持つ。夜の闇、インクの黒さ、意識の闇がおたがいに重なりあっているわけである。この意味で太陽の死である“美しい自殺”は詩人の自殺行為である詩作に重なりあう。それ故にこそこの太陽の死は一見最高の栄誉の象徴である王者の彩りと緋色の輝きを帯びているのである。だが詩篇が創作されるのはまったくの闇の中ではない。たしかに闇は必要な条件ではあるが、すべてが闇の中に閉ざされてしまえば、これは意識の闇、イジチュールの闇となり狂気、死のなかで果てるほかはない。この闇ばかりの世界では詩篇は遂に誕生することができないであろう。詩篇には母性としての白さ、光りもまた必要なものであって、この闇には光源が必要なのである。ところで日々死んでゆく太陽にはこの光源としての資格はない。従って詩人は日々の自殺を逃れ得るもうひとつの太陽、想像的太陽である金髪へ呼びかけるのである。第2行目の“栄光のもえさしよ、泡なす血よ、黄金よ、嵐よ”というよびかけが金髪に対するものであるという解釈は、最初に引用した詩人の金髪礼讃のギャラントリーからみても十分に納得がいくのではないかと思う。詩人は太陽の没した彼方に用意されているように見える“緋色”（栄光の象徴）を嘲笑する。その栄光がしょせんは滅びるべき運命にあるからだ。事実栄光を祝うべき詩人はその彼方にはつき従わず、彼の不在の墓だけが空しく示されるだけである。彼は地上の祝祭のために存在しているのであって彼方とは無縁なのである。この一節で使われている“彼方”“美しき自殺”“不在の墓”といった語は生の彼岸での栄光を表わすかのような印象を与えている。人間は物質の空しい一形態でしかないと確信していたマラルメにとって、彼岸での栄光などおよそ意味のないものであった。彼にとって存在するのはこの世界のみであり、この世界を詩にうたうことによって世界は永遠化されるのである。「詩は聖別である」という彼の言葉はこの意味に理解されねばならないだろう。そして詩における永遠の太陽としての金髪が第2節で高らかにうたわれるのである。

Quoi ! de tout cet éclat pas même le lambeau  
 S'attarde, il est minuit, à l'ombre qui nous fête  
 Excepté qu'un trésor présomptueux de tête  
 Verse son caressé nonchaloir sans flambeau, <sup>8)</sup>

(何ということだ！ この真夜中、われわれを壽いでくれるこの闇の中には、昼間のあの輝きの一かけらも残っていない。

ただ頭のひともなげな財宝が愛撫をうけた放心を炎もあげずに注ぐだけ)

この節においては太陽は完全に姿を消し去っており、昼間の華やかな輝きの断片すら残っていない。今は真夜中であり、すべてが闇に包まれようとしている。「真夜中」はマラルメに特有の時間であり、イジチュールやブティクスのソネに親しんだことのある読者にはすでになじみのものである。マラルメにおいて「真夜中」とは精神の極北を示す時刻であり、意識の根底をあらわす闇である。この闇こそ詩人に特有の闇であり、また詩人の存在を脅かす闇でもある。必要な闇ではあるが、全面的にそこに呑みこまれてはならない。実際、この闇の中で金髪だけが微かな光を発し、詩人を闇に呑みこまれることから守っているのである。Trés-or という表現に示されているように金髪こそ黄金のなかの黄金であって、闇の中で唯一の発光源としての役割を果たしているのである。詩人を守る太陽としてのこの金髪は詩人にとって常に大いなる喜びであり、第三節以下で詩人は最大の讚美をこの金髪に捧げるのである。

La tienne si toujours le délice ! la tienne

Oui seule qui du ciel évanoui retienne

Un peu de puéril triomphe en t'en coiffant

Avec clarté quand sur les coussins tu la poses

Comme un casque guerrier d'impératrice enfant

Dont pour te figurer il tomberait des roses.<sup>9)</sup>

(いつも、かくも喜びであるお前の頭よ、そうだお前の頭だけが、光の消え失せた空から少しばかりのあどけない勝利を保持し、それを髪につけている。

さんぜんとお前がその頭をしとねの上におく時、それは幼い皇后の戦いのかぶとのようでもあるだろう、そのかぶとからはお前をあらわすようにバラが垂れてもいるであろう)

夕ぐれに太陽がつかのまの喜びであるのに対して、金髪は“常に”詩人の喜びであり続ける。空にはもはやいかなる光の名残りもみられないが、金髪はいまだに光を保っている。この光こそ、金髪の太陽に対する“勝利”の証しなのである。金髪は想像的太陽にふさわしく闇の中でも“さんぜん”とした光を放っており、想像的なものの現実的なものに対する優位をあらわすように“戦いのかぶと”として輝いているのである。このような特性をそなえた金髪を持っている女性は、当然ながら想像的なものの至上の力をあらわす“皇后”として現実的なものの上に君臨する。この皇后を偲ばせるかのようにかぶとからバラの花

が垂れている。このバラはすべてが闇のなかにある時に金髪の光をうけてせんせんと輝いているのである。マラルメの象徴体系にあって花、とくにバラの花は詩のアナロジーとして語られていた<sup>10</sup>。この詩においても、最後にあらわれるこのバラを、この“美しい自殺を誇らかに逃れて”のソネそのものであると考えることは充分可能であると思う。まさしくこの詩篇そのものが、金髪のあでやかな光をみごとにうたいあげているわけであるから、詩篇＝バラとみなしてもよいと思う。想像的太陽である金髪への讃歌であるこの詩篇がバラそのものへと化しているわけである。

太陽と光を競いあう金髪のテーマはマラルメの他の詩篇“お前の物語に登場する私は”においても顕著にあらわれている。今までにのべたことと関連するものとして、この詩の終りの二節の部分を考察してみたい。

Dis si je ne suis pas joyeux  
Tonnerre et rubis aux moyeux  
De voir en l'air que ce feu troue

Avec des royaumes épars  
Comme mourir pourpre la roue  
Du seul vespéral de mes chars.<sup>11</sup>

(雷鳴とルビーを車軸にはめこんだ、この火が穴をうがっている空中に、散乱した王国を伴って、私の戦車のうちの唯一の夕べの戦車の車輪が緋色に染まりながらどのように死んでゆくかを見て、私が楽しそうでないか言っておくれ)

mes charsという複数の表現でわかる通り詩人は2つの戦車を持っている。一つはここで中心となつてうたわれている夕べの戦車、太陽であり、もう一つは最初に“言っごらん”と呼びかけられている金髪の女性である。そしてこの詩においても戦車という戦いのイメージがあらわれている。太陽がギリシア神話においてファエトンの乗り物である戦車であったことの連想ももちろんあるであろうが、それにもまして想像的なものと現実的なものの戦いのイメージであろう。前のソネでそうであったようにこの詩においても夕べの戦車、太陽は戦いに敗れて死んでゆくのである。彼の王国は詩人が住むべき不滅の王国ではない。散乱して潰走するその王国にはもはや王国としての資格はない。一方、この死んでゆく太陽に対してもう一つの戦車である金髪は直接にはうたわれていない。しかしその対立物である太陽の死は金髪の勝利を暗黙のうちに示していると言えよう。金髪と同じく太陽も雷鳴やルビーをそなえたきらびやかで荘重なものである。しかしついには滅びてゆくものであるから、詩人はこのような戦車を惜しんだりはいしない。そもそもこの太陽の火が激しく空中にうがっている穴は太陽自身の墓穴ではないだろうか。太陽がどのよう

に王者らしく緋色につつまれて死んでいこうとも、詩人はそういった自殺からは誇らかに逃れ去るのである。もう一つの戦車、永遠の太陽である金髪を手に入れている彼は太陽のそういった死をまのあたりにみても、却って“楽しそう”なのである。なぜなら彼は想像的太陽が現実の太陽にうち勝つ喜ばしい光景に直面しているからである。

ここまでの検討によって、金髪が詩人の想像的太陽であり、それが現実の太陽よりも遥かに優れたもの、永遠のものであるということを明らかにし得たと思う。最後に“髪…”と端的に題された詩篇を考察してみたい。この詩においても詩作の闇にある詩人を見守る太陽である金髪というテーマが目を見はらせるようなみごとなイマージュでうたいあげられており、マラルメの傑作の一つと名高い作品である。

La chevelure vol d'une flamme à l'extrême  
Occident de désir pour la tout déployer  
Se pose (je dirais mourir un diadème)  
Vers le front couronné son ancien foyer<sup>12</sup>

(それをすっかり拵げてしまいたいという欲望の西の涯への炎の飛翔である髪、その髪は(王冠が死んでゆくようだとでも言おうか)昔からの故郷、冠をいただいた額のあたりに収まる)

この一節においても金髪と太陽のいわば運動的対比があらわれている。“欲望の西の涯”へと飛翔する炎である金髪はその炎という様態と西への飛翔という運動において“お前の物語に登場する私は…”のソネにおける、空中に穴をうがって進む戦車である太陽と酷似しているからである。ただ前の場合と異り、このソネにおいて死んでゆくのは王冠としての金髪である。“美しい自殺を誇らかに逃れて…”のソネでは金髪は皇后の戦いのかぶとにたとえられていたが、ここでは至上の力を獲得した王冠としてうたわれている。そしてこの王冠が死んでゆく(もちろんこれはきれいに編みあげられた髪が解かれてゆくことをあらわしており、欲望の西の涯＝欲望のきわみ、という表現とあいまって強烈なエロティスムの印象を与えているが)わけであるが、しかしこの死は太陽におけるような単に否定的なものでは決してない。なぜならこの死は冠をいただいた額、王冠の故郷への回帰であり、その意味でこの死は王冠が再びその至上の力をとり戻すための必要な死なのである。この死からよみがえった時、金髪は本来の美しい輝きを放射するであろう。また金髪はその輝きをとり戻すために他のもの、とりわけ現実の太陽などを必要とはしない。金髪そのものが発光体であり、その光は内部から放射されるのである。

Mais sans or soupirer que cette vive nue  
L'ignition du feu toujours intérieur

Originellement la seule continue

Dans le joyau de l'oeil véridique ou rieur <sup>13)</sup>

(しかしこの髪は生き生きとした雲、常に内部に存在する火の燃焼しか欲しない。この燃焼こそ真剣なような笑っているような眼の宝石の輝きのうちに唯一はじめから続いているものだ)

難解な第一行目は *sans soupirer d'autre or que cette vive nue* という解釈に従おう <sup>14)</sup>。この解釈がもっとも説得的であり、無理がないように思われる。金髪は他の光を求めようとはしないし、またその必要もない。金髪の内部において常に火の燃焼があり、金髪を発光体そのものとしてきたのである。この火の燃焼こそが唯一の発光源として“はじめから”存続してきたのであり、金髪は今でこそつかの間の休息のうちで輝きを失っているかもしれないが、すぐに輝きをとり戻すであろう、事実、この輝きの最初のあらわれが既に眼という宝石の輝きのうちに、まだ真実の点火であるかどうかは分からないが、ともかくもあらわれはじめていたのである。それ自身が発光体であり、その輝きのためには自ら以外の何ものも必要としない金髪は詩人にとって詩の理想の象徴である。第三節以下においてうたわれるのはまさしく詩人の理想としての金髪の栄光である。

Une nudité de héros tendre diffame

Celle qui ne mouvant astre ni feux au doigt

Rien qu'à simplifier avec gloire la femme

Accomplit par son chef fulgurante l'exploit

De semer de rubis le doute qu'elle écorche

Ainsi qu'une joyeuse et tutélaire torche. <sup>15)</sup>

(優しい男は渾身の姿になって女性をからかう <sup>16)</sup>、その女性は指に星も火も動かさず、単に栄光にみちて女性を単純化することで、さんぜんと輝きながら懐疑にルビーをちりばめるとい手柄をその金髪によって果す。その懐疑の皮をこの女性は快活なまた護りの炬火として剥ぐのだが)

冒頭に金髪を讃えて歌う詩人の“渾身の姿”があらわれる。詩人の渾身の姿であるからには、これはまさしく詩人の本質、詩そのものにほかならぬであろう。金髪は燃焼を続けることによって詩そのものの本来の姿を明らかにするに到るのである。終りから2行目に“皮を剥ぐ”という表現がみられるが、これは燃やすことによって皮を剥ぎ本質を明らかにするという意味に解し得るだろう。第2節との関連からいっても、また最終行に“炬火”という語が用いられていることからみてもこの解釈は妥当であると思われる。炬火は燃え



ることによって照らす道具である。この燃焼が金髪の内在的炎によって行われることは前の節でみた通りであり、実際金髪は“星”も“火”も必要とすることなく（2行目）、ただ自分の光だけで詩の本質の姿を明らかにするといういさおしを栄光にみちて果すのである。金髪は懷疑の皮を剥ぎ、それをルビーで飾るのであるが、これはどのような意味に解すべきであろうか。まず懷疑とはマラルメに特有の詩に対する懷疑であろう。彼は詩というこの“至高の遊戯”に対して、果してそれが可能であるのかどうかという深刻な疑惑を抱いていたのは周知の通りである。この疑惑ゆえに彼は“白い苦惱”という不毛性に生涯にわたって苦しめられるのだが、金髪はこの疑惑の“皮を剥ぐ”即ちその本質的な意味、詩作にはこの疑惑が必須の条件であるということを明らかにするのである。そして金髪はこの懷疑を“ルビーで飾る”。これはその懷疑に本質的な価値を与えることであろう。さらにいえばルビーはその色において赤いバラの花に通じる。前にのべたようにマラルメにおいてはバラの花は常に詩篇とのアナロジーで語られている。従ってルビーで飾るということは、詩作の不能という懷疑に対して具体的詩篇、すなわちこの“炎の飛翔である髪”というソネそのもを与えることであるということもできよう<sup>17)</sup>。

一般に金髪詩篇群はマラルメの作品群のうちでは特異なグループとみなされ、評価がさまざまにわかれているが、以上みてきたように筆者は金髪詩篇を非常に高く評価する。金髪は想像的太陽として現実の太陽にはるかにまさり、不滅性をそなえ、内部からの発光体として闇の中での唯一の光源の役割を果し、詩人を闇から守り、詩人に詩を与えさえもするのである。

## 注

- 1) Michel Foucault, *Les mots et les choses*, Gallimard. 1966 p. 314 以下
- 2) Stéphane Mallarmé, *Oeuvres Complètes*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1945 (以下 O.C. と略記) p. 366
- 3) 青年期に彼が発狂に近い精神錯乱状態に陥ったことは「イジチュール体験」として名高い。引用した文は1866年4月友人のアンリ・カザリスにあてた手紙のなかに見いだされるものである。
- 4) O. C. p. 251
- 5) O. C. p. 44 “Hérodiade” Scène.
- 6) O. C. p. 68 “Victorieusement fui...”
- 7) とりわけ Gardner Davies, *Mallarmé et le drame solaire*, José Corti 1959 p. 75
- 8) O. C. p. 68

- 9) *O. C.* p. 68
- 10) 3部作の第2番目のソネ“*Surgi de la croupe et du bond ...*”の最終行“*Une rose dans les ténèbres*”は明らかに生れようとして生れ得ない詩篇をさしている。  
(*O. C.* p. 74)他にもマラルメには花と詩篇のアナロジーは随所にあられる。
- 11) *O. C.* p. 75
- 12) *O. C.* p. 53
- 13) *O. C.* p. 53
- 14) この解釈はA. Adamによって提供され、(*Pour l'interprétation de Mallarmé* nizat 1951 p. 221), J.-P. Richard (*L'univers imaginaire de Mallarmé*, Seuil 1961 p. 348)とG. Davies(*op. cit.* p. 173)によって支持されている。
- 15) *O. C.* p. 53
- 16) *diffamer*というと普通は“悪口を言う”という強い意味だが、ここでは“からかう”というほどの軽い意味にとりたい。*Celle qui*以下が*diffamer*の内容であるのは明らかだが、その内容は悪口などではなくむしろ讃辞であるからである。
- 17) ソネ“シャルル・ボードレールの墓”(*O. C.* p. 70)の第一節で“ルビー”の語がみられ、これはボードレールの詩を指すと解釈される。本稿の詩でもルビーを詩篇と解釈すると面白いと思うのだが、どうだろうか。この詩でうたわれている女性は宝石は持っていないのだから、現実のルビーではないはずだが。

(D. 54)